

琉球空手の歴史と(琉球)空手の教育的視点・活用  
～*The history of Ryukyu Karate and educational viewpoints, practical use of*  
*(Ryukyu)Karate.*～

1K08B171-2

比嘉 良士

指導教員 主査：小野沢 弘史

副査：岡田 純一

[序章：卒業論文の題材にした理由]

今回、私が卒業論文を書くにあたって、私にとって身近な格闘技は何なのか考えてみた。そこで、私が生まれ育った沖縄で発祥し継承されてきた「琉球空手」に着目した。私が小学生の頃は、周りの友達が道場に通っていたりしたが、その流派や特徴は全く知らなかった。今回の卒業論文を書くことを機に、地元が生んだ文化について調べたいと思った。

[一章：琉球空手の歴史]

まず、琉球空手がどのようにして生まれたのかを調べ、理解をしない限り琉球空手のことを考えることは難しいだろう。琉球空手の歴史を遡っていくと、元の発祥はインドに辿り着く。これは、実際に記されているわけではないが、伝説として受け伝えられている。私は琉球空手は、中国発祥でその後、琉球(沖縄の旧名)に伝わったものだと考えていたのだが、日本から遠く離れたインドで発祥したという事実には驚きだった。インドで発祥した原型は、中国へと流れることによってまた進化した。中国での話も信憑性が低く、伝説と言う形で受け継がれているが、少林寺拳法と大きく関係していることが分かった。そして、15世紀ごろから始まった朝貢貿易で当時の中国の文化に影響され、沖縄に元々あった「手(ティー)」と融合同化して現在の琉球空手の基礎が出来上がったのだ。そして、現在では様々な流派があるが、特に大きく変わったものはなく流派を作り仕切りを置くところは沖縄の習慣がそうさせているのだろう。

[二章：琉球空手と空手]

卒業論文を今回書くにあたって、私が疑問だと考えていたのは、琉球空手と本土の空手では何が違うのかということだ。元々本土の空手も琉球王国から伝わったものであり、考え方や思想はそう変わらないものがある。しかし、この二つの空手の間には大きな相違点がある。まず始めに、武器を持つか否かである。琉球空手は棒術、トンファー、ヌンチャクといった武器の演武も含まれているのに対して、本土では棒術は棒術だけで独立し、空手道とは

素手だけで行うものと考えられている。このような考え方から、昔から本土の人は、己の拳を武器のようにするために鍛え上げているのだろう。もう一つ考えるのであれば、それは「生の空手」なのか「死の空手」なのかである。本土でも、伝統的な空手とは寸止めをし、その打撃が有効であるかを決めるだけであるのに対して、直接打撃(フルコンタクト)が認められている極真空手もある。琉球空手や本土の伝統的な空手は、相手に戦意を喪失させるのが目的であり、直接人に当てることは滅多にない。一方の(極真)空手は、相手の体に直接打撃を加え精神的にだけではなく肉体的にも制圧することを目的としている。これが「生の空手」と「死の空手」だ。

[三章：琉球空手の教育的な見方]

武道とは人の人格形成を促すために体を鍛え、精神を鍛えるというもので、これは教育の現場にも使えるのではないのだろうか。私は考えている。武道は本来、武士(琉球では士族)の武士道から当てられており、いくつもの流派がある。武士道は「こころ」という立場と「わぎ」という立場で構成されており、「こころ」は人としての考え方を問うものであり、転じて教養となる。「わぎ」では、技術を習得することを指しているので、転じて運動と捉える事ができる。つまり、武道というのは「文武両道を目指すこと」として考えることができるのだ。そこで、琉球空手を現在の学習指導要領に採用するには何がカギになるのかについて述べた。

[終章：今ある琉球空手]

琉球空手を教育場面に取り入れるには、まず琉球空手の存在を多くの人が認識することである。しかし、残念ながら沖縄の人でさえその存在を知らない人がいる。従って、教育現場に空手を取り入れるならば、その普及も重要である。